

母親の養育態度が子どもにおよぼす影響

— 幼稚園でいろいろな問題を示した事例を中心に —

権 平 俊 子

前号において、吃音児の事例を中心に、母親自身の問題が子どもの養育にいかにか影響するかについていくらかの考察を加えてみた。本号では、幼稚園でいろいろな問題を示した事例をあげ、母親と子どもの関係、並びに幼稚園での問題につき、考えていきたいと思う。

一、事 例

Y・K 四才八か月 男児

(相談に来所した動機)

幼稚園に昭和三十四年四月に二年保育で入園したが、入園当初より全く団体生活をしないで、ひとり勝ち行動をしている。受持教師が心配し、知人の心理学の大学教授に相談したところ、教授より筆者に相談するようにいわれた。そこで受持教師が相談してくるようにすすめて、昭和三十四年六月二十六日に母親がY・Kをともなって来所した。しかし、当日、筆者の時間があいていなかったため、翌日、再び来所するように依頼した。母親はこれより以前、昭

和三十二年十一月十三日本児三才一か月の時に下の子ができて嫉妬、友達についてという主訴で当所に来所し、他の相談員が担当している。(筆者の手落ちで、再来かを問わなかったため、これを母親が語ったのは母親との面接第四回であった。)

(問題)

幼稚園で団体行動をとらず、皆んががお祈りをしているとき、ひとりで園長の壇に上つてみたり、奇声を発したり、先生の悪口をいう。遊戯や歌のときも同様である。昼食の時も歩きまわって、殆んど食べない。友達の上被りを缺で切つたり、黒板のチョークを全部折つたり、砂場の砂に水を入れたりする。しかし、ひとりで何かつくっているようなときは、集注時間は長くつづき、作品も立派なので、知能の発達はおくれないようだ、と受持教師はみている。

家庭における様子については、母親は幼稚園の教師からの紹介のため、幼稚園を断られては困るというような様子で、家庭で困るこ

とは殆んどない、とはじめのべている。その後、面接を重ねた結果えた家庭での問題は次のようである。食慾は乳児期より不振で苦勞している。Y・Kが二才三か月で弟が出生したが、生まれたての弟をひどくいじめるので、人形を与えたりした。現在でもひどくいじめる。それでいて母親がいないとよく面倒をみるようだ。近所の家についていたずらをするから、心配でよその家に遊びにやられない。カバンや洋服をかじる。何でも粗末にする。友達と一しょに近所の店でガムをとってきた。母親に対して反抗的で言うことをきかない。しかし「おべんとうを残してくるとおかあちやまが悲しむから」と途中で捨ててきたりする。

(生活史)

出生状態—— 熟産、正常分娩、第一度仮死、生下時体重、三キログラム。

授乳状態——

三か月まで母乳、三か月後人工栄養になったが、牛乳が合わないで、飲まず苦勞した。完全離乳 一年

發育状態—— 歩き始め 十か月半、話し始め 一年

既往症—— 牛乳を飲まないで、小児科で注射をしたりした。湿疹

がでやすい。麻疹二年六か月、風邪はひきやすい。

排尿排便のしつけ—— 生後一年頃より便所でさせるようになった。

大小便とも苦勞なくしつかり、口で一年十一か月で教えるようになる、おむつは完全にとれた。

そいねは全くしなかった。最近、弟と先を争って朝、母親の寢床に入ってくる。

母親は自律のためと考えて、初めからサークルに入れてほうっておいた。

母親は弟もすぐできたことなので、早くおとな扱いにした、と思うし、早くおとなになってもらいたいと思っている。

近所に同じ年令の子どもはいるが、遊びは長続きせず、すぐけんかする。父の勤め先の官舎の鉄筋アパートに住んでいる。

(家族関係)

父親は三十五才、大学卒、技師、母親は二十八才、短大卒、無職、弟は二才六か月、女中が本児の二才八か月から三才四か月までいて、育児、家事を手伝っていた。

(初回面接)

昭和三十四年六月二十七日に約束した時間にY・Kをともなつて来所した。Y・Kに対して、鈴木ビネー法による知能検査をおこなった。母親からすぐ離れて入室する。すぐ答えるが、解らないと課題と違うことをする。少しおちつきがないが、テストには割合によく応じる。テスト結果は知能指数一二五(三才一か月のときおこなつたときは一一九)。

母親との面接をおこなうつもりで、テスト後少し待合室で待っていてくれるように頼む。母親と面接をはじめると、面接室の外にできて、泥をつかんで、母親と、面接中の部屋の窓に投げつけた。筆者は、母親との面接を本児が非常に嫌がっているように思われたので、六月三十日に母親だけの来所を求めて中止した。

六月三十日に母親は弟をつれて、定刻に来所した。弟がいたので

面接はブレイ・ルームでおこない、弟は玩具であそばせ、その側で母親と面接をおこなった。母親は緊張した様子で、幼稚園で困った行動が多くて、注意を受けた。家庭では余り困ったことはない。この子のことを幼稚園でもてあましているらしい。止めさせられるようになっては困ると思うし、かわいそうだ。家庭では余り困ったことはないのに、どうしてこんなだろうと訴える。筆者は出生時の仮死状態のこともあり、一応コントロールはしているようだが、異常行動が多いので、脳波の測定をすすめたところ、母親はすぐに了解した。そこで当小児科に脳波を依頼し、その結果を含めて、もう一度面接をしたいと話した。

脳波結果——全く異常なしと連絡があった。

(母親との第二回)

八月五日、母親のみ来所。脳波の結果を説明すると同時に、子どもに対する遊戯療法を簡単に話し、Y・Kに対しても適当な治療法だと思ふ、という、是非ともお願いしたいと希望した。そこで、時間、費用につき話し合うと同時に、Y・Kの前で本人の話をしながら、電話、手紙で連絡があれば、面接をすることを話した。

(経過)

昭和三十四年八月十八日より昭和三十五年十月十七日まで(但し家の都合で四月八日から五月二十日まで休み。第三十回―第三十一回) Y・Kに対して筆者が遊戯療法五十一回をおこなった。無断で欠席したことはなく、来所時間も一定していて、十分以上のおくれは六回ほどであった。次に遊戯療法の経過をごく簡単にのべてみよう。

〈第一回―第二回〉

すぐにひとりて入室し、よく遊び片付けまでよくして帰る。

〈第三回―第十四回〉

母親から離れて入室するのに抵抗を示し、弟が一しよにきた日は、どうしてもひとりて入室せず、弟と一しよに遊戯室に入室した。弟に対して、始め世話をしていたが突然頭の毛をむしって泣かせてしまう。治療中はだんだんと攻撃的行動を示し、治療者の万年筆の先を割って、治療者の顔色をうかがう。叱られないと、直るかと何回もきく。治療者は罪の意識をもたせないように努力した。

〈第十五回―二十四回〉

母親からは簡単に離れるようになったが、入室をすぐにしないうで、階段を屋上まで上ってきたりする。しかし、黙って待っている、入室してくる。粘土を壁にぶつけたり、人形をふみつけたりする。その反面、折紙を折るときなどは正確である。マシントイの構成などは熱心にする。本を読んでもくれといって、待合室から持ってきたりする。治療者が読んでやると、もたれかかって座り、何度も何度も同じ本を読むようになって、熱心に聞き入っている。

〈第二十五回―三十回〉

攻撃的行動は少なくなり、描画をしたり、乗物を動かして遊ぶ。治療者に本を読んでもらうことはつづく。

〈第三十一回―四十回〉

休んだ後で少し攻撃的行動は増加し、床に水をまいたり、折紙で色水をつくる。本を読んでもくれといって、熱心に聞いている。

〈第四十一回〜第五十一回〉

攻撃的行動が少なくなってきた。描画し、折紙、積木など構成的な遊びをする。本を読んでもくれということは少なくなってきた。

以上五十一回で、母方、祖母の家の女中がいなくなった（弟を家におくため、留守にきている）ことと、幼稚園で殆んど問題がなくなったし、食事もよくなるようになったので、母親と話し合つて、治療を終結した。

前記紹介者の幼稚園教師が、幼稚園側との不和で三月で退職された。そのため幼稚園での本児に対する扱いが急に変わり、叱られ続けているのでよくないからという理由で（また祖母の病気で治療を休んでいるためもあるように思う）退園させ、H幼稚園に転園させようとしたが、一週間の観察期間で断られ、U幼稚園では快よく引き受けてくれた。Y・Kを理解して、急いで集団行動に入れようとなかったで、だんだんと生活になれて、こちらの治療の進むとともに問題行動を示さなくなってきた。

二、考 察（母親のカウンセリングを中心に）

Y・Kに対して遊戯療法を筆者がおこない、その間母親に筆者が七回カウンセリングをおこなった。そして、母親の求めにより、紹介者である幼稚園の受持教師と一回面接をおこなっている。

母親ははじめ、幼稚園から相談するようにとすすめられたためか、非常に警戒的であった。Y・Kのことについても、家庭では殆んど問題ないと語っている。治療者の立場について、ここでの話しは

幼稚園に母親の了解なしに連絡はしないということなどを話した。

母親はだんだんにY・Kの困っているいろいろな問題につき話しはじめた。弟の出生当時から、ひどくいじめ、ほとほと困り、人形を与えてみたりした。それでもだんだんとひどくなるので、当所に三才一か月のときに相談に訪れ、友達遊びをさせるようにいわれた。現在でもいじめて困る。食慾がなく、おべんとうも殆んど食べたくない日がある。母親は余り食べないと体のためによくない心配になり、つい口やかましく言ってしまう。父親がそばにいて、そんなにいうと却って食べられないだろうという。父親自身も食慾はない方だ。そのため、食事に父親が帰ってくると、もう食べないでいいねといって、立ち上ってしまう。母親もいわない方がよいとも思うが、ついいってしまう。そのためかおべんとうを残して来たときに、途中で捨ててくるようになった。そしてどうしてそんなことをするのかと聞くと、「おかあちやまが悲しむから」という。自分のいったことをひどく気にしているのだなど反省した。結婚後、すぐに妊娠したため、この子が出産したとき、ひどく大へんだと思ってしまった。小さいうちから自立心を養うことが大切だと思い、殆んどねかせばなしにし、はいはいするようになってからは、サークルに入れっぱなしで育てた。三か月頃より乳をのまなくなり困っている、当小児科で診察を受けた。それからずっと食慾不振で困っている。弟ができてから、母親にかえて甘えてくるようになった。この子は自分に顔もにているので、余り好きでない。弟の方は同じことをしても可愛げがあるけれど、この子がすると憎らしくてしかた

ない、という。面接の際、弟をともなって訪れたことがあるが、本児の扱い方と非常に異り、弟がいたずらをして、寛容な態度をとっているのに対して、本児がちょっとしたいたずらをして、そういうことをしてよいのかと、反省させていた。

幼稚園の先生に会ってくれと希望したので、紹介者である受持教師と打ち合わせて、十月二十日來所していただいた。礼拝のとき大きな声を出す。自分に声をかけられたり、してもらっているように、注意をむけられているようなときはひどく素直である。おべんとうはいつもよく考えてつめてある。おかずだけ先に食べて、残すと「お母ちゃんがガツかりするから、先生手紙かいて」という。

母親のきげんをいつも気にしているようだ。この間家庭訪問をしたら、余りに弟との扱いが違うのでびっくりした、と話し、園長はひどくこの子をきらっている。受持教師は少し手をかけた方がよいと思うが、甘やかしてはいけない、きびしくしろといわれる。きびしくしたらいけないと思うが、と述べている。その後、この教師は園長と意見が合わず、三月で退職した。

その結果、幼稚園での本児の扱い方が違ってきた。また祖母の病気でこちらの治療を休んでいたのも影響し、本児の幼稚園での問題行動は一時、大分少なくなってきたのに、再びひどくなってきた。

園長に母親が呼び出されて、家での扱い方が悪いからだ、もっときびしくしなくてはと言われた。母親はひどく腹を立て、幼稚園を退園させた。嫌われている幼稚園に入れておくのは可哀そうだ。本児を赤ん坊のときから、おとな扱いにしすぎたと、最近反省してい

る。早くから、サークルに入れっぱなしにして育ててしまった。母親は本児が自分に気に入られようと随分努力しているように感じることさえある。それをすなおに表現できず、ひねって注意をひこうとしているのではないかと思うようになった。弟と較べてみると、弟と同じ年頃の本児には、上だということではいろいろな要求をしてもまったく、弟は小さいのだからと本児に我慢させ過ぎたと思う。園長はきびしくないからだというが、そうではないと思う、と話した。この子に適当な幼稚園と、家の近所の幼稚園をまわって歩き、事情を話して、快よく引き受けてくれたU幼稚園に転園させた。転園当時は、治療前の状態のようであったが、すぐに無理やりに集団に入れようとしなくて、暖かい態度で迎え入れてくれた。新しい幼稚園の生活にだんだん慣れて、おべんとうの時に立って歩くこともなくなり、運動会にも皆んなと同じようにしたので、母親は嬉しくなったのとべている。母親の扱い方も非常に違ってきた。朝寝床に入ってきたときなど入れてやるようになった。その反面、床屋などにひとりでゆきたいというときには行かせ、今まではお金を絶対に持たせなかったのに、小遣いを与えた。そのためガムをとってやることもなくなった。このような状態について、母親自身、自分の扱い方をかえて、よくなってきたように思う、とのべている。昭和三十六年の年賀状で元気に通園していると知らせてきた。

(愛育研究所)